

＜研究ノート＞

現存社会主義論の批判的研究

——小野一郎氏の所説に寄せて——

中 村 平 八

学ぶべき基本視角

小野一郎氏（立命館大学教授）の現存社会主義論は、氏自身の言葉によれば、次のような視角に立脚している。すなわち、現代社会主義を理論的に検討し、その問題状況を正しく把握するためには、①「科学的社会主義の古典の理念」、②「現存社会主義の実態と理論」、③「資本主義世界で提示されている社会主義像」という「三者の接点」を探り、この接点において「世界史的運動としての社会主義の現在位置と展望」を明らかにすることが重要であり、その場合、ソ連など現存社会主義は、科学的社会主義の「古典の理念から出発して実在に転化した唯一の社会主義」であるから、「その現実を十分にふまえることの意味が過小に評価されてはならない」⁽¹⁾。

われわれは小野氏のこの「基本視角」に賛成である。なぜなら、現存社会主義の世界史的意義や特徴と本質、その現在の発展段階および将来の発展方向、等々は、「三者の接点」において真に学問的に確定できるからである。また資本主義世界（発達した資本主義諸国と発展途上諸国）における社会主義的将来の展望は、主として当該国の勤労民衆の実践と理論によって切り開かれるのは当然としても、そのさい科学的社会主義の古典と現存社会主義の歴史的経験は、道標としての役割を果たしうるからである。さらにまた科学的社会主義の理論そのものが、現存社会主義諸国および現代資本主義諸国の社会主義をめざす歴史的経験と実践によって、豊かになり発展するからである。科学的社会主義の古典、現存社会主義、現代資本主義諸国（発展途上諸国を含む）の社会主義への道の実践と理論——この三者は相対的に独立の認識領域

をなすとはいえ、切り離しえない相互連関を有している。したがって、小野氏が提起した「三者の接点」から現代社会主義の三つの領域に切り込み、ふたたび「接点」にもどるという反復的研究方法は、現代社会主義を研究するさいに、決定的に重要な意義を有している。

社会主義の意図的歪曲者やデマゴグは論外として、学問的に誠実な研究者のなかで、小野氏が提起した「三者の接点」の視角を、その社会主義論に生かしえているものは少ない。発達した資本主義国たとえば日本等々、非社会主義的発展途上国たとえばインド等々における社会主義的発展を展望する研究に、現存社会主義をめぐる議論が恣意的に流入したり、現存社会主義の研究に、科学的社会主義の古典の諸命題が直接かつ代替的に登場したり、科学的社会主義の古典の研究に、現存社会主義あるいは現代資本主義の「実態と理論」が無批判的に混入する例がきわめて多いのである。

せっかく正しい方法的視角を提示したにもかかわらず、遺憾ながら小野氏の現存社会主義論もまた上に述べた弊害をまねがれていない。「三者の接点」において現代社会主義とりわけ現存社会主義を理論的に検討する作業は、言うはやすく実行はむづかしい。われわれとしては「三者の接点」の方法に立脚して小野氏の現存社会主義論を検討するとともに、われわれの試論を提起したいと思う。やや弁明めくが、小稿では「現存社会主義」と「科学的社会主義の古典」との関連が問題となり、「発達した資本主義諸国の運動が提示する〔社会主義〕理念」との関連は除外される。われわれは「発達した資本主義諸国の運動が提示する理念」とともに今日の「発展途上諸国の運動が提示

する理念」についても知見を深め、それらと現存社会主義および「科学的社会主義の古典」との関連について検討する機会をえたいと考えている。

マルクス主義古典解釈上の問題点

マルクス主義古典の共産主義社会論(移行論=過渡論を含む)を正確に理解するためには、マルクス、エンゲルスの個々の著作、特定の著作の片言隻語に頼るのではなく、彼らの生涯の全理論活動に依拠しなければならない。そのような努力の集積にもとづいて総括的に言うことは、第一に、「マルクスとエンゲルスは、資本主義の発展そのものが社会主義の前提条件、すなわち、その生産力的・物質的基盤の創出と担い手たる労働者階級の主体形成を準備するものとみなした」こと、第二に、「世界体制としての資本主義の発展は恐慌や戦争をつうじて世界的規模で矛盾の熟成をうながさずにはいないし、その結果、先進国・世界革命による社会主義への移行が実現するという見通しをもっていた」こと⁽²⁾、第三に、世界革命の端緒は先進国革命によって切り開かれる可能性がより大であるとはいえ、後進国革命が先行しそれが先進国革命を誘発して世界的規模での社会主義への移行が実現する可能性もまた存在すること、の三点である。小野氏の古典解釈上の誤りに対する批判は、以上の総括的論点にもとづいて行われる。

よく知られているように、共産主義社会 *komunistische Gesellschaft* の内的継起的発展段階に関するマルクスの定式は、『ゴータ綱領批判』(1875年)のなかで与えられている。マルクスによれば、資本主義社会から生成する共産主義社会には、二つの連続的発展段階が存在する。共産主義社会の第一段階つまり低い段階は、「それ自身の土台の上に発展した共産主義社会ではなく、反対にいまようやく資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会」であり、「あらゆる点で、経済的にも道徳的にも精神的にも、その共産主義社会が生まれでてきた母胎たる旧社会の母斑をまだおびている」——第1 a 命題。共産主義社会の第一段階は、第二段階=より高い発展段階に成長転化する。共産主義的社会構成の全本質が成熟したか

たちで直接に発現するこの高い段階の共産主義社会こそ、「それ自身の土台の上に発展した共産主義社会」であり、そこでは「旧社会の母斑」は消滅し、労働は「第一の生命欲求」となり、個人は全面的に発展し、高度な生産力に裏づけられた「必要に応ずる分配」が実現され、国家は死滅し、社会的自治が実現する——第1 b 命題。同じ『ゴータ綱領批判』のなかでマルクスは、「資本主義社会と共産主義社会とのあいだには、前者から後者への革命的転化の時期がある。この時期に照応してまた政治上の過渡期がある。この時期の国家は、プロレタリアートの革命的執権以外のなものでもありえない」という定式を提示している——第2 命題。周知のように、この第2 命題と第1 a および第1 b 命題との関連をめぐる、同じことだが第2 命題そのものの解釈をめぐる、対立する二つの解釈が提出されている。小野氏は、長砂實氏(関西大学教授)らと同じく、第2 命題のなかの「共産主義社会」を「共産主義の第一段階としての社会主義」と読みかえ、第2 命題がいう「革命的転化の時期」すなわち「過渡期」とは、資本主義社会から共産主義社会の第一段階としての社会主義社会への過渡期であると主張する。小野氏によれば、マルクスは、共産主義的社会構成の生成と展開を、(1)資本主義社会から社会主義社会(共産主義社会の第一段階つまり未成熟な低い段階)への過渡期、(2)社会主義社会、(3)共産主義社会(狭義の共産主義社会、共産主義社会の高い段階)と考えていた、とされる。

小野氏は、このようなマルクス解釈を主張するにあたって、マルクス主義の古典から七箇所の引用を行っている(マルクス『ゴータ綱領批判』から三箇所、エンゲルスとの共著『共産党宣言』から一箇所⁽⁴⁾、レーニン『国家と革命』等の三論文から各一箇所)。小野氏の論証方法が明示しているのであるが、氏は、マルクス主義の古典ということでマルクス、エンゲルスの仕事とレーニンの仕事とを区別せず、むしろ両者を積極的に併用している(後出)。ほかでもなくまさにこの点に、小野氏の「過渡期」論および「現存社会主義」論の混乱の根拠があり、誤謬の原因がある。このような混乱と誤謬

をさげ、ソ連・中国など現存社会主義の世界史的意義、その本質と基本的矛盾、現在の発展段階と今後の発展方向、等々について、これを真に学問的に明らかにするためには、マルクス、エンゲルスの社会主義・共産主義論の原像を正確に復元する必要がある。なるほどレーニンはマルクス以後最高の傑出したマルクス主義理論家であり、科学的社会主義の思想と理論を大いに発展させた。だがしかしレーニンには、世界的な原理的一般的抽象的レベルでの考察とともに、ロシア革命と革命後ソ連の指導者としての立場からの一国的な応用的特殊的具体的レベルでの考察があることを忘れてはならない。レーニンの「過渡期」論はまさに実践の必要に迫られて後者のレベルで定式化されたものであり、彼の定式と、マルクスが『ゴータ綱領批判』でなした原理的一般的抽象的レベルでの共産主義社会論（移行論＝過渡論を含む）の定式とは、厳密に区別されなければならない。

マルクスが『ゴータ綱領批判』で展開した共産主義社会に関する諸定式——第1 a, b 命題、第2 命題、等々は、かの『資本論』での「近代社会の経済的運動の法則」の解明をふまえて提起されたものであり、彼が想定した「共産主義社会」とは、「近代社会」の否定、つまり発達した資本主義社会＝成熟した資本主義社会の否定によって生成する共産主義社会であった。それゆえ『ゴータ綱領批判』の諸命題は、小野氏がいう「資本主義的發展の後進性」を特徴とするロシア資本主義、土台と上部構造の双方に「前資本主義の後進性」を刻印するロシア資本主義、このような「後発資本主義」⁽⁵⁾を素材にして定式化したものでないことは明らかである。小野氏自身も、『ゴータ綱領批判』など古典の諸命題⁽⁶⁾が「一般的・原理的命題」であることを指摘している。

第1 a 命題は、「長い生みの苦しみのうち資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会の第一段階」について、その「一般的・原理的」特徴を定式したものである。ここでマルクスがいう「長い生みの苦しみ」とは、母胎が赤子を生みだすまでの出産時の陣痛を指していることは明らかであり、赤子の出生、つまり社会主義革命の勝利

によって、陣痛は終わり、資本主義時代に終止符が打たれる。他方で、「生まれたばかりの共産主義社会の第一段階」は、「母胎たる旧社会の母斑」をおびた赤子として成長を開始する。小野氏が指摘しているように、「共産主義社会の第一段階」としての社会主義社会は、「共産主義それ自身の基礎のうえに旧社会の母斑をくっつけている」という意味で、過渡的・二重的性格をもっている⁽⁷⁾。しかし「共産主義それ自身の基礎」と「旧社会の母斑」とを対等・同量のものと理解してはならない。とりわけ「二重的性格」の強調は危険である。マルクスのたくみな比喻が示しているように、共産主義の赤子（過渡的成長段階の人間、低い発展段階の人間）は、共産主義の成人（成熟段階の人間、高い発展段階の人間）へと成長していく。この成長過程で赤子の母斑は漸次消滅する。つまり「共産主義の基礎」の成長過程は、同時に「旧社会の母斑」の消滅過程でもあり、二つの過程は統一的過程として進行する。しかし「共産主義の基礎」の成長過程が主過程であり、「旧社会の母斑」の消滅過程が副過程であることを忘れてはならない。

「母胎たる旧社会の母斑」をおびた「共産主義社会の第一段階」の「過渡的・二重的性格」は、かかるものとして理解できるのであり、小野氏のように、「基礎」を共産主義的要素、「母斑」を資本主義的要素と読みかえ、両者を対等の対立要素だと措定し、二者対抗的な死活の矛盾——「だれが、だれを」の矛盾、「二つの道」の矛盾——とする論理は、マルクスにはない。ところが小野氏は、このような論理をマルクスがもっていたと論断し、この虚構の論断にもとづいて、「資本主義社会から社会主義社会への過渡期」がマルクスの過渡期論であると主張する。小野氏もまた、長砂實氏ら通説支持者と同じく、マルクス・レーニン一体論の立場に立ち、マルクスの「過渡期」論とレーニンの「過渡期」論がまったく同一であると考ええる。それを明確に示しているのは、小野氏の以下の立論である。「マルクス主義古典の命題から出発して問題に接近するかぎり、過渡期と社会主義社会の区別ははっきりしている。社会主義社会

は、『ゴータ綱領批判』にいう“共産主義それ自身の基礎”の契機を内包する社会的所有が支配しており、私的所有と搾取関係が排除されているという意味で、未成熟ではあっても基本的には無階級社会としての本性をもつかぎりにおいて、共産主義の一つの段階をなす歴史的位置にある。これにたいして過渡期とは、レーニンが指摘するように、資本主義的所有や小商品生産的所有などの私的所有と、それらにもとづく社会経済制度が社会主義のそれとならんで存在する多ウクラードの時期であり、したがって搾取関係と敵対的性格の階級矛盾が存在しており、それ相応の形態における階級闘争をつうじて資本主義から社会主義への革命的転化が進行する歴史的時期である⁽⁸⁾」。

このような小野氏の立論は、マルクス主義の共産主義社会論に二つの誤りをもちこむ。一つは、マルクス「過渡期＝社会主義社会」論の解釈上の誤りであり、いま一つは、レーニン「過渡期」論の世界史的意義の把握上の誤りである。まず前者について検討しよう。よく知られているように、19世紀のマルクスは、世界的規模での人類の共産主義的将来を展望し、それへの移行を先導する社会（社会勢力）として近代ブルジョア社会＝発達した資本主義社会（プロレタリアート）を想定したが、具体的にはそれは、小野氏も指摘しているごとく、「典型的に発展したイギリスの資本主義⁽⁹⁾」社会であった。マルクスの共産主義社会論の前提をなした「典型的に発展した資本主義」とは、個人的で分散的な生産手段が社会的に集積された生産手段へ転化し、多数の矮小所有が少数の大量所有へ転化し、民衆の大群から土地や生活手段や労働用具が収奪され、その結果古い社会は「深さから見ても広がりから見ても十分に」分解してしまい、勤労者が原義どおりプロレタリアに転化し、彼らの労働条件が資本に転化して、資本主義的生産様式そのものが自分の足で立つようになった資本主義社会である。いいかえれば、資本主義時代にすでに、前資本主義的あるいは非資本主義的ウクラードの資本主義的ウクラードへの転化過程が完了し、規定的ウクラードとしての資本主義が国民経済を全一的に支配している、そういった資本

主義社会である。このような資本主義社会のもとで、社会主義の主体的前提としての労働者階級が成熟し、客体的前提としての「労働過程の協業的形態、科学の意識的な技術的应用、土地の計画的利用、共同的にしか使えない労働手段への労働手段の転化、結合的社会的労働の生産手段としての使用によるすべての生産手段の節約」が発展する。資本主義的生産そのものの「内在的諸法則」の作用によって、「諸資本の集中」すなわち「少数の資本家による多数の資本家の収奪」が進行し、それとともに、資本主義的生産過程そのものの機構によって「訓練され結合され組織される労働者階級」の反抗もまた増大する。かくして「資本独占は、それとともに開花しそのもとで開花したこの生産様式の桎梏となる。生産手段の集中も労働の社会化も、それがその資本主義的な外皮とは調和できなくなる一点に到達する。そこで外皮は爆破される。資本主義的私有の最後を告げる鐘が鳴る。収奪者が収奪される。……資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生みだす⁽¹⁰⁾」。

再三強調するのであるが、マルクスが共産主義社会論を構成するさいに前提した資本主義は、上に述べたような発達した資本主義、それから抽象される資本主義であり、前資本主義的ウクラード（たとえば農奴制）とか非資本主義的ウクラード（たとえば小商品生産）を随伴する後進資本主義、特殊的具体的な資本主義ではなかった。前記の一般的抽象的な資本主義は、プロレタリア革命の勝利を契機に、直接に共産主義に移行する。それゆえこの社会革命は最初から社会主義革命であり、この革命の勝利後に、社会主義ウクラードと並んで非社会主義的諸ウクラードが併存する「多ウクラード期」、同じことだがこれらのウクラードの「社会主義的改造」のための「特殊な過渡期」が存在する余地は、論理的にも実際的にもないのである。斎藤稔氏（法政大学教授）が正しく指摘するように、「〔共産主義への〕移行の主体的・客観的（物質的）前提はすでに資本主義の発展の過程で十分に成熟しているので、この移行は一挙に実現し、生産手段の社会的所有への転化とともに計画

的な生産と分配が可能になる。したがって、共産主義の第一段階としての社会主義に移行するための特殊な過渡期は原理的に存在しない⁽¹¹⁾」(傍点斎藤)。

マルクスが『ゴータ綱領批判』のなかで提起した第2命題は、発達した資本主義社会といえども共産主義社会のより高い段階へは直接移行できないこと、したがって共産主義社会のより高い段階への「革命的転化の時期」＝「過渡期」の社会が必然的に存在すること、この過渡期の国家はプロレタリアート執権であること、を定式している。つまり第2命題は、第1a命題でいう「資本主義社会から生まれたばかりの共産主義社会〔の第一段階〕」の上部構造、とりわけ国家を定式したものにはかならない。

以上の考察で明らかなように、マルクスの共産主義社会論(移行論＝過渡論を含む)は、発達した資本主義を素材にして一般的原理的に展開されており、第2命題は第1a命題を国家論の見地から補強したものである。小野氏自身の表現を借りるならば、マルクスは、「少なくともいくつかの高度に発達した資本主義諸国が、ほぼ同一の歴史的時期に社会主義に移行するようばあい」を想定して、「理論的に典型的な移行の類型」を定式したのである⁽¹²⁾。小野氏の誤りは、マルクスの共産主義社会発展段階論とりわけ移行論＝過渡論を、ソ連の歴史的経験に合うように裁断したことである。小野氏がなすべきであったことは、マルクスの共産主義社会論(移行論＝過渡論を含む)の原像を確認した上で、「マルクスとエンゲルスの先進国・世界革命の見通しとは二重に異なるきびしい歴史的制約」のもとで、つまり後進国・一国革命という歴史的制約のもとで、社会主義への移行を意図している今日のソ連について、そしてこのソ連を先導したレーニンの理論的営為について全面的に研究し、「理論的に典型的な移行の類型」である先進国型移行類型とは区別される「特殊な類型」＝後進国型移行類型を提起することであった⁽¹³⁾。この「特殊な類型」について付言するならば、われわれの別稿での検討が明らかにしているように、その萌芽的問題提起はすでにマルクスとエンゲルスの理論的遺産のなかにあり、レーニン

が「資本主義から社会主義への過渡期」の理論として発展させているのである⁽¹⁴⁾。

ソ連社会主義論の問題点

小野氏の現存社会主義論で評価できるのは、第一に、現存社会主義を、世界的かつ世界史的視点から捉えようとしていることである。小野氏はいう。現存社会主義は、世界的視野で見れば、「部分的・局地的な存在」にとどまっており、「世界資本主義の中心部」にはおよんでいない。現存社会主義は、「部分性＝局地性という制約」に加えて、「社会・経済発展の後進性」を抱えて発生した。今日の社会主義は「世界史的にはなお初期的段階」にあり、「生成期の社会主義と規定できる」⁽¹⁵⁾。第二に、ソ連社会主義の形成過程を考察するにあたって、その「特殊な国際的・国内的条件」に注意を払っていることである。「ソ連は後発的資本主義から社会主義に移行した国であり、社会主義の形成過程は、経済的土台においても上部構造においても前資本主義の後進性をおびた状態を出発点として展開された。そのうえ、この過程は帝国主義の包囲のなかでの一国社会主義建設という国際的条件のもとで進行したのであって、成立したソ連社会主義は資本主義世界体制のなかにある社会主義体制にすぎなかった」⁽¹⁶⁾。それゆえ「30年代後半に形成されたソ連社会主義は、出発点における後進性と一国社会主義建設という二重の条件に規定されて、社会主義の十全な生産力的基盤の形成および社会主義の生産関係と上部構造の実質的形成に関して、特殊に未成熟なものを少なからず残していた」⁽¹⁷⁾。

小野氏の視点からする現存社会主義評価は、ソ連などで通説になっている現存社会主義評価とはいちじるしく異なる。まず第一に問題となるのは、現存社会主義の世界的位置および意義である。この点に関してソ連など現存社会主義国の公式見解は、主観的かつ楽観的である。彼らによれば、現代は「資本主義から社会主義への移行を基本的内容とする……時代」であり、「社会主義と共産主義が世界的な規模で勝利する時代である」。「社会主義は資本主義よりはるかにすぐれた社会

体制であることを証明した」。「社会主義は上り坂にあるが、帝国主義は衰退にむかっている」。社会主義世界体制は「人類社会発展の決定的要因に転化しつつある」⁽¹⁸⁾。この世界認識は、現存社会主義の過大評価、現代帝国主義の過小評価という誤りをおかしているという以上に、20世紀世界の基本的特徴を把握していないというより大きな誤りをおかしている点で、重大な欠陥を有している。この世界認識と小野氏の世界認識——現存社会主義は今日なお世界資本主義の中心部＝心臓部に及んでいないという「部分性＝局地性」に加えて「社会・経済発展の後進性」を抱えて発生したという二重の制約を受けている——とは、20世紀世界の客観的歴史的諸事実の評価において対照的である。いうまでもなく小野氏の認識が真実に近くソ連などの認識は真実から遠い。

小野氏とわれわれとが認識をほぼ共有するのはここ⁽¹⁹⁾までで、現存社会主義あるいはソ連社会主義の基本的性格、その現在の発展段階および発展方向、等々については、残念ながら見解を異にする。小野氏は、ソ連など現存社会主義の発展段階を区分する理論的用具として、レーニンの社会主義社会発展段階論を援用する。レーニンの社会主義社会発展段階論は、小野氏の表現を借りるならば、マルクスが「理論的に典型的な移行の類型」として定式した共産主義社会発展段階論とは異なり、後進資本主義の「共産主義社会の第一段階として社会主義」への移行を「理論的に特殊な移行の類型」として定式したものである。レーニンは1920年に実践的必要に迫られて次のような問題を提起した。後進民族が、社会革命の勝利を契機に、「資本主義的発展段階を飛びこえて、一定の発展段階を経て共産主義へ移行することができるという命題を確立し、理論的に基礎づけなければなら⁽²⁰⁾ない」。これよりやや早い時期の1919年に、レーニンはすでにこの問題を基本的に解決していた。後進資本主義国では社会主義をつくりだすという「目的を一挙に実現することはできません。それには資本主義から社会主義へのかなり長い過渡期が必要です。それは、生産を組織がえすることが困難な仕事だからでもあり、生活のすべての

分野における根本的な転換のためには時間が必要だからでもあり、また小ブルジョア的およびブルジョア的な経営方法に慣れた習慣の大きな力は長期のねばり強い闘争を通じてはじめて克服できるからでもあります」。「資本主義と共産主義とのあいだに一定の過渡期があることは、理論上疑いをいれない。この過渡期は、この二つの社会経済制度の特徴または特性を一つに結合したものとならざるをえない。この過渡期は、死滅しつつある資本主義と生まれようとする共産主義との闘争、いいかえれば、打ち破られはしたが絶滅していない資本主義と、生まれはしたがまだまったく弱い共産主義との闘争の時期とならざるをえない」。この時期の基本的な社会経済形態は、「資本主義、小商品生産、共産主義」であり、基本的な社会階級は、「ブルジョアジー、小ブルジョアジー（とくに農民）、プロレタリアート」⁽²¹⁾⁽²²⁾である。

もちろん、レーニンのこの定式は、今日の科学的社会主義の理論水準からみれば、若干の不正確さをまぬがれていない。第一に、マルクスが一般的抽象的に定式した「資本主義から共産主義（共産主義のより高い段階）への過渡期」、つまりあらゆる国あらゆる民族が経験する「一般的過渡期」と、マルクスが定式しえなかった「後進資本主義から社会主義（共産主義の第一段階）への過渡期」、つまり後進国および後進民族のみが経験する「特殊な過渡期」とが明確に区別されていない。第二に、「特殊な過渡期」を「多ウクラード期」のみに限定し、「多ウクラード期」に後続する「二所有制社会主義期」⁽²³⁾について言及していない。レーニンの定式は以上のような弱点を有しているにもかかわらず、「一般的な過渡期」（および一般的過渡期社会としての社会主義社会）とは区別される「特殊な過渡期」（および特殊な過渡期社会としての発展途上国型社会主義社会）の存在の必然性を論証し、さらにこの「特殊な過渡期」の第一小段階としての「多ウクラード期」の本質を解明したことによって、マルクス主義の社会主義社会論に偉大な貢献をなした。

さて小野氏は「マルクス主義は死んだ教条でなく発展の理論である」ことを正しく指摘している

にもかかわらず、レーニンの定式はマルクスの定式でもあるとしてまず最初の誤りをおかし、ついで、マルクスとレーニンをごちゃまぜにした共産主義社会発展段階論をつくり、これをソ連など現存社会主義の発展段階規定に使用するという第二の誤りをおかしている。小野氏の第一の誤りは、共産主義社会発展段階論に関して、すでにのべたように、マルクス、レーニン一体論に立ち、両者を区別せず、混同していることである。一体論は、共産主義社会に関するマルクスの定式・命題の一般性および規範性の無視をもたらすとともに、レーニンが創出した後進国＝発展途上国型社会主義の発展理論、同じことだが20世紀世界の新生事物としての発展途上国型社会主義の世界史的に独自の意義の把握を妨げる。したがって小野氏らの誤りは、瑣事にかかわる誤りでなく、根底的な誤りであるといえよう。

小野氏の第二の誤りは、氏の主張するマルクス＝レーニンの共産主義社会発展段階論 (1)資本主義社会から社会主義社会への過渡期、(2)社会主義社会、(3)共産主義社会が、ソ連など現存社会主義の段階規定として適用されるさいに発現する。小野氏は、社会主義社会への過渡期の基本的特徴を、レーニンの「過渡期」論を援用して、資本主義ウクライナと共産主義ウクライナとの死活的闘争を軸とする多ウクライナ制に求める。小野氏にとって「過渡期」とは「多ウクライナ期」と同義である。したがって多ウクライナ制の消滅は、過渡期の終了、社会主義社会への移行完了を意味する。もっとも小野氏は、多ウクライナ制の消滅を「過渡期の終了」の直接の指標とはしておらず、長砂氏らと同じく、資本主義ウクライナの基礎をなす「資本主義的所有」や小商品生産ウクライナの基礎をなす「小商品生産的所有」などの私的所有の廃絶を「過渡期の終了」＝「社会主義社会の成立」の基本的指標としている。小野氏らは、生産手段の私的所有の「廃絶」を社会的所有もしくは社会主義的所有の「確立」と同一視し、これをもって社会主義的生産関係への社会成員の包摂の基本的「完了」を語るという一点三面論法を用いて、⁽²⁴⁾「ソ連は1930年代後半、他の諸国はほとんど

50年代末ごろまでに過渡期を終了して社会主義段階に移行したものと考えられる」と結論する。⁽²⁵⁾これは奇妙な弁証法である。「私的所有の廃絶→社会的所有の成立→社会主義的生産関係の成立」という等式的移行式は、形式論理的には成立しうるかもしれない。だがこの形式論理的な等式的移行式は、二つの危険な欠陥を有している。一つは科学的社会主義の社会主義社会論にかかわるものであり、レーニンの過渡期論は完全無欠の定式であるのかという問題である。いま一つは、現存社会主義国につねに観察される宣伝的イデオロギー的先走りの問題であり、時の政権の政策を天まで持ちあげマルクスやレーニンの言葉で飾りこれを合理化する悪しき傾向に対して批判的であらねばならないという問題である。

前記の一点三面論法にもとづく等式的移行式に関していえば、この形式論理を支える実体が問題であり、私的所有がどのように否定され、どのような社会的所有が実現し、その結果どのような社会的生産関係が成立したかが問われねばならない。⁽²⁶⁾それなしにはこの等式的移行式の適用は無意味であり、有害ですらある。遺憾ながら小野氏にはこのような問いはない。レーニンはたしかに過渡期の基本的特徴として多ウクライナ制に言及しているが、多ウクライナ制の解消がただちに「過渡期の終了」＝「社会主義社会の成立」を意味すると述べたことはなかった。

1924年に死去したレーニンは、1930年代後半にソ連社会で発生した質的变化をみていない。われわれの仕事は、レーニンならばソ連社会のこの社会的変化をどのように総括したであろうかという点に思いをめぐらし、自分の頭でこの社会的変化を理論的に検討することである。ところが小野氏は、そのような努力はせずに、ソ連で私的所有と多ウクライナ制を廃絶して1930年代後半の成立する二所有制社会を「共産主義社会の第一段階としての社会主義社会」とみなすのである。かくして小野氏は、「30年代ソ連型社会主義」について多様な形容句を用いて説明せざるをえなくなる。——「未成熟で不完全な社会主義」、「その特質がまだ完全に展開されるには至らない社会主義社会」、

「社会主義の実質的形成の点での特殊な未完性」をおびた社会主義、「さまざまな倍加された旧社会の母斑をはらんだ」社会主義、「過渡期的ないしは社会主義以前の様相」をかなり強くおびた社会主義、「深刻な歪みを抱えた社会主義社会」、「ソ連一国社会主義の二重にきびしい歴史的制約をうけた社会主義」、「社会主義の特質が完全に発現するにいたらない初期段階⁽²⁷⁾」の社会主義、「初期社会主義」、「生成期社会主義」。

小野氏は、ソ連など現存社会主義国の理論家の自国認識、社会主義認識の通弊として、「社会主義の形成・発展を社会主義的所有の制度ないしは形態の点で形式的にとらえるにとどまって、その経済的・社会的実体の点でとらえようとする理論的視角が確立していなかった」点を指摘し、その「主観主義的かつ非現実的な判断」、「理論的かつ具体的な自己認識の不足」、「理論的自覚および具体的認識の欠如」、総じて現存社会主義の「過大評価」を正しく批判している。⁽²⁸⁾しかし小野氏は、スターリンの共産主義社会発展段階説——それはレーニンの未完の「過渡期」論およびマルクスの「過渡期＝社会主義社会」論を歪曲したものである——を基本的に受容しているため、いきおいその批判は根幹にかかわらない瑣末主義に陥っている。⁽²⁹⁾それゆえスターリン批判以後のソ連共産党の共産主義社会発展段階説（1961年党綱領）やソ連憲法の共産主義社会発展段階説（1977年）に対する批判も根底的でなく、むしろ後者に対しては積極的評価を下しているかにみえる。小野氏は、ソ連現行憲法の前文に記載されている「発達した社会主義社会は、共産主義社会への道における合法的な一段階である」という説の意義を認めて、「“発達した社会主義”という概念は、社会主義社会の発展段階を規定する理論的概念として設定しうる」と考える。しかし小野氏は、同じ憲法前文がいう「ソ連邦においてはすでに発達した社会主義社会が建設されている」という現実認識には賛成しない。「現段階のソ連社会主義をそのまま言葉の完全な意味で“発達した社会主義”とみなすには無理がある」⁽³⁰⁾と考えるのである。小野氏は、「ソ連は1930年代後半、他の諸国はほとんど50年

代末ごろまでに過渡期を終了して社会主義段階に移行した⁽³¹⁾」という認識のもとに、この社会主義段階を二つの小段階——「初期社会主義＝生成期社会主義＝未成熟で不完全な社会主義」の小段階と「発達した社会主義＝成熟した完全な社会主義」の小段階——に区分し、ソ連は現在、「社会主義の初期的発展段階から発達した社会主義への移行局面にはいりつつある」とか、「初期社会主義段階から成熟した社会主義の段階への移行の局面をなすような、社会主義の新しい発展局面にはいった」⁽³²⁾と述べている。また小野氏は、ソ連社会主義の現局面についてこうも述べている。「現段階のソ連社会主義経済は、生産力的にも生産関係的にも、社会主義の初期的発展期から、社会主義の完全な成熟＝共産主義への移行のための前提条件の創出にむかって本格的な発展をとげてゆくべき段階への移行局面にさしかかっている」。⁽³³⁾小野氏はその最新の論文の一つで、「現存社会主義は全体として“30年代ソ連型”社会主義からの脱皮の模索に踏み出しながらも、古い体制の体質、大国主義、さらに資本主義との対抗のインパクトの制約を受けて、決定的な前進をとげえないままの過渡的な局面にあって足踏みしており、多くの国で停滞あるいは混迷から抜け出せないでいるのが現状である」⁽³⁴⁾とも述べている。だが小野氏の現存社会主義認識の理論的枠組は従来と変わっていない。

小結

小野氏とわれわれとの社会主義社会論をめぐる意見の相違は明らかである。小野氏は、過渡期を小野的社会主義への過渡期に限定し、かつ小野的過渡期の本質を生産手段の多所有制にもとづく多ウクライド制に求め、この過渡期の終了をもって小野的社会主義の成立とし、この社会主義を二つの時期——初期社会主義と発達した社会主義——に小区分し、ソ連など現存社会主義国の一部はおおむね前者から後者への移行局面にある、とする。

これに対してわれわれは、ソ連など現存社会主義を次のように規定する。⁽³⁵⁾(1)現存社会主義は、もしこれを簡潔に定義するならば、発展途上社会主義である。(2)発展途上社会主義は、世界体制とし

ての資本主義のもとで従属的發展をよぎなくされた民族が、社会革命の勝利後に、国家権力をてこに、目的意識的に社会主義の諸前提を創出する特殊な社会主義である。社会主義への過渡段階としての発展途上社会主義の歴史的地位は、すべてこのことによって規定されている。(3)発展途上社会主義は、その政治的本質からすれば、国家社会主義である。発展途上社会主義の全段階を通して、国家は積極的役割と否定的役割とを果たす。この国家は、本質的には労働者階級の権力であるが、国家権力の行使は、労働者階級の前衛である共産主義者(前衛党)が代行する。発展途上社会主義の国家は、発展途上社会主義の発展の度合に応じて、徐々に国家社会主義の性格を失い、労働者階級の権力としての本質を現出し強化する。(3)発展途上社会主義は質的に区別される二つの発展段階をもつ。第一段階は多ウクラード社会主義であり、基本的には、生産手段の所有の三つの形態にもとづく三つのウクラード(社会主義、資本主義、小商品生産)が併存する。第二段階は二所有制社会主義であり、生産手段の国家的所有および協同組合的所有にもとづく単一の社会主義ウクラードが国民経済を支配する。第一段階は、社会主義をめざす社会革命の勝利に始まり、非社会主義的諸ウクラードの改造、生産手段所有制の改革の基本的終了までの時期であり、第二段階は、低次の社会的所有の二つの形態としての生産手段の国家的所有および協同組合的所有にもとづく低次の社会主義ウクラードの全一的国民経済支配に始まり、生産手段の高次の社会的所有としての全人民的所有にもとづく高次の社会主義ウクラードの全一的国民経済支配への移行実現によって終了する。上に述べた高次の社会主義ウクラードとは、マルクスの規定した共産主義社会の第一段階としての社会主義社会の経済にはかならない。

過渡期論の見地からいえば、「特殊な過渡期社会＝発展途上社会主義社会」と、マルクスの定式した「一般的過渡期社会＝共産主義社会の第一段階としての社会主義社会」とは、厳密に区別されなければならない。「特殊な過渡期社会＝発展途上社会主義社会」は、「一般的過渡期社会＝社会主義

社会」の前段階に位置すると同時に、後者への過渡段階社会でもある。発展途上社会主義と社会主義、同じことだが「特殊な過渡期」と「一般的過渡期」の混同は、理論的にも実践的にも有害である。中国の文化大革命はその典型例であった。

われわれの見解によれば、現存社会主義はすべて今日なお発展途上社会主義(類型的には途上国型社会主義)の発展段階にとどまっている。そしてわれわれの見解の方法的基礎には、小野氏によって提示された方法論的見地としての「三者の接点」に立脚して現存社会主義を研究するという方法が貫かれていると考える。しかし小野氏の結論とわれわれの試論とは、まったく異なるものになった。小野説は、現存社会主義に関する多数説＝通説のヴァリエーションの一つである。われわれの説は、少数説＝異説の一つである。しかし、学問上の真理は多数決によって決まるものではない。通説に立脚する論者との討論を期待したい。

* 小稿で検討の対象とした小野氏の論稿は次の二つである。以下の注では前者をA、後者をBと略記する。

小野一郎『現代社会主義経済論』青木書店、1979年。

小野一郎「社会主義への世界史的移行過程の展開と現段階の展望」(『講座 今日の世界資本主義』第10巻所収、大月書店、1982年)。

- (1) A……415, 297—298ページ。岩林彪氏は、今日の科学的社會主義＝マルクス主義の三つの構成要素として、①科学的社會主義の「古典」、②「現存社会主義」、③「資本主義諸国の社会主義運動」を指摘され、社会主義経済研究の緊要な課題は、この三つを総合する「三位一体的方法論」を確立することであると述べている。小野氏の「三者の接点」の方法論と同主旨のものであると思われる。われわれもこの観点に賛成である(岩林彪「わが国における社会主義経済研究の一断面——“前期的、社会主義論批判を中心に”『経済』新日本出版社、1977年5月号所収)。
- (2) 第一と第二は小野氏の視点であり(B……250ページ)、われわれも同意見である。しかし小野氏の社会主義論には、われわれがかねて主張している第三の視点——世界史における後進国革命の可能性と意義に関する視点——が欠落している。
- (3) マルクス『ゴータ綱領批判』大月書店版全集、第19巻、19—20、21、28—29ページ。
- (4) 小野氏のマルクスからの引用は、注(3)の三箇所に加えてマルクス・エンゲルス『共産党宣言』全集第4巻、494ページ。レーニンからの引用は、『国家と革命』大月書店版全集、第25巻、495ページ、「ハンガリアの労働者へのあい

- さつ」全集第29巻, 391ページ, 「プロレタリアートの執権の時期における経済と政治」全集第30巻, 94—95ページの三箇所である。注(2)および(22)の本文箇所を見よ。
- (5) A……3, 165ページ、B……251ページ。
- (6) A……170ページ。
- (7) A……10、12ページ。
- (8) A……12ページ。
- (9) A……5ページ。
- (10) マルクス『資本論』全集第23巻 b, 993—995ページ。
- (11) 斎藤稔『社会主義経済論序説』大月書店, 1976年, 6ページ。小野氏もまた斎藤氏とはほぼ同じ認識を示しているにもかかわらず (A……250ページ), 結論は斎藤氏とまったく異なったものになっている。
- (12) A……166ページ。小野氏が論理的自家撞着を示しているのはこの箇所である。念のためその箇所を全文引用する。「……社会主義への移行を, 資本主義から社会主義への世界史的移行過程として世界的ひろがりにおいてとらえるとき, 理論的に典型的な移行の類型と考えられるのは, 少なくともいくつかの高度に発達した資本主義諸国が, ほぼ同一の歴史的時期に社会主義に移行するようばあいであろう。このような理論的視角からすれば, ソ連は国内的条件と国際的条件の両方についてむしろ特殊な類型に属しているわけで, 典型的な移行のばあいに生起しないか, あるいは解決済みであるはずの種々の問題が, “旧社会の母斑” を倍加するようなかたちで社会主義の段階にもちこまれざるをえなかった。30年代後半に形成されたソ連社会主義は, 出発点における後進性と一国社会主義建設という二重の条件に規定されて, 社会主義の十全な生産力的基盤の形成および社会主義の生産関係と上部構造の実質的形成に関して, 特殊に未成熟なものを少なからず残していたといわねばならない」。
- (13) B……251ページ, A……166ページ。
- (14) われわれの見解については, 中村平八「マルクス主義の共産主義社会論」(『現代ソ連の経済と産業』所収, 日本国際問題研究所, 1976年) を参照されたい。
- (15) B……249, 255ページ, A……4ページ。
- (16) A……165—166ページ。
- (17) A……166, 253ページ。
- (18) 「社会主義国の共産党・労働者党代表者会議の宣言(1957年)」「共産党・労働者党代表者会議の声明(1960年)」(『日本共産党綱領集』所収, 日本共産党中央委員会出版部, 第6版, 1964年)。
- (19) 厳密に言えば, 小野氏には注(2)で指摘した第三の観点が欠落しているため, 小野氏とわれわれの現存社会主義認識は, 決定的に異なったものとなる。
- (20) レーニン「共産主義国際ナショナル第2回大会」全集第31巻, 237ページ。
- (21) レーニン「ハンガリアの労働者へのあいさつ」全集第29巻, 391ページ。
- (22) レーニン「プロレタリアートの執権の時期における経済と政治」全集第30巻, 94—95ページ。
- (23) レーニンは1924年に死去しており, 1930年代後半のソ連社会の質的变化を体験していないことに注意せよ。
- (24) A……12—14, 163—167ページ。
- (25) A……21ページ。
- (26) A……163ページ。
- (27) A……162, 165—167ページ, B……252, 254ページ。
- (28) A……163, 171—172, 176, 183—184ページ。
- (29) A……168—172ページ。
- (30) 「ソビエト社会主義共和国憲法」(『世界憲法集』岩波書店, 第3版, 1980年), B……162ページ。
- (31) A……9, 13—14, 21ページ。
- (32) A……22, 162, 174, 197ページ。
- (33) A……229ページ。
- (34) B……260ページ。
- (35) 中村平八「発展途上社会主義」(神奈川大学『商経論叢』第18巻第1号)。

小稿はもともと, 小野一郎『現代社会主義経済論』(青木書店, 1979年) の書評原稿として1979年秋に執筆されたが, 書評原稿としては長すぎることによって依頼誌への掲載はとりやめとなった。小野氏は上記の著書を出版後, 論文「社会主義への世界史的移行過程の展開と現段階の展望」(『講座 今日の日本文学』第10巻, 大月書店, 1982年) を発表された。そこでこの論文をも論評対象として1983年春に書き直したものが小稿である。

その後小野氏は, いわゆる社会主義「生成期」論争と関連して, 論文「現存社会主義の発展段階をどうみるか」(『前衛』1983年9月号) を発表されたが, この論文は小稿での考察対象に入っていない。われわれの感想によれば, 上記小野論文は, 小稿が論評の対象とした前記二論稿の延長線上にあり, 小稿の記述を変更しなければならないような, 小野社会主義論の革新はないように思われる。